

# 薬物依存症 回復への道

薬物依存やアルコール依存などに苦しむ人たちが回復を目指す民間の依存症リハビリ施設「タルク」。入寮者の多くが生活保護制度を利用しています。生活保護基準が引き下げられた場合、リハビリプログラムへの影響が懸念されています。

(鮎野裕子)

茨城県結城市にある茨城タルクの一日は朝6時半の起床から始まる。薬物依存やアルコール依存、ギャンブル依存(病的賭博)からの回復を目指す人たちが共同生活を送っています。朝食後のミーティング、ソフトボールやランニング、太鼓の練習、地域ボランティア活動などのリハビリプログラムを日替わりで行います。

神奈川県出身の森口亮さん(仮名、38)は、アルコール依存症で2年前に入寮しました。シンナーや大麻、合成麻薬MDMAの使用歴もありますが、アルコールだけではやめられ

ませんでした。

## 迎え酒で出勤

依存症への入り口は中3の時。同級生たちとの月1回の飲み会でした。口下手でストレスをため込みやすい性格でしたが、酒を飲むと冗舌になり、友達と楽しくすごすことができました。しだいに常飲するように。就職後は毎晩飲み歩き、翌朝、迎え酒をおおりに出勤していました。仕事中に飲んでいることを同僚に気づかれないよう、清涼飲料水を焼酎で薄めたペットボトルを常備しました。

しだいに酒を飲まないと手が震え、酒なしでは仕事ができなくなります。酒代に困ると、コンビニや商店で万引きをして店員や警備員を殴り、逮捕されることをくり返します。肝硬変になって入院しても、医療用アルコールを飲んでしまい、止めに入った医師や看護師を殴って強制退院させられました。酒なしでは何もできない

# ストップ 生活保護改善

このタルク独特の回復プログラムが今後、生活保護基準が引き下げられた場合これまで通りできるのか。スタッフや利用者、家族の間に心配が広がっています。

# 制度を利用し共同生活

い自分に嫌気がさして自暴自棄になり、何度も自殺未遂をしました。

## 「やり直そう」

34歳の時、親に連れられ、茨城タルクへ来ます。しかし3カ月で飛び出し、万引きと傷害で2回目の刑務所へ。2年間の服役中、「今度こそやり直そう」と決意したものの、出所したその足でコンビニに向かいワイスキーを手にしてしまいました。再び体を壊して入院。実家へ戻り、今

## 生き方を学ぶ

度には自分からタルクへ行きたいと申し出ました。入寮して2年たった今、酒をやめられています。代表の岩井喜代仁さんは、依存症からの回復のキーワードは仲間だといいます。「仲間がどんなにやめろと言っても、一人ではやめられないのが依存症という病気。ここで仲間と共同生活を送りながら、薬物を使わない生き方を学ぶのです」



夕飯のしたくをする茨城タルクの人たち。自ら希望した食事当番の人が毎食作ります

仲間とともに今日一日、薬物(アルコール)を使わない生活が「仲間」といいます。森口さんは今、スタッフを任せられ、自身の回復を目指しながら仲間を支えます。仲間が自分にしてきてくれたことを、新しい仲間にならにしているといえます。「自分がここにきた時に仲間が助けてくれたから、今の自分があります」

このタルク独特の回復プログラムが今後、生活保護基準が引き下げられた場合これまで通りできるのか。スタッフや利用者、家族の間に心配が広がっています。

(つづく)

# 薬物依存症 回復への道

薬物やアルコール、ギャンブル依存(病的賭博)などの依存症に苦しむ人たちが回復を目指す民間の依存症リハビリ施設「ダルク」。

全国に50団体が運営する68施設があり、約1000人の利用者がいます。

施設の運営形態は、運営団体によってさまざまです。大きく分けると、小規模作業所やグループホームなどの障害者サービス提供者として運営する施設

と、利用者が支払う入費や家族・支援者からの献金などで運営する施設があります。

**施設運営に影響**

茨城県結城市にある「茨城ダルク」の場合、後者の運営形態で、月15万円の入費を設定しています。入費者やその家族が入費を払えるケースは少なく、入費者の約8割が生活保護制度を利用しています。そのため生活保護基準の引き下げが施設の運営に大きく影響します。

「薬物依存症は病気である」という社会の認識が薄いため、患者の家族が孤立せざるを得ない問題を指摘します。「薬物依存は患者本人の心身を傷つけるだけでなく、家族も巻き込む病気です。暴力や借金など全ての問題を家族だけで抱え込み、「家庭崩壊」に追い込まれることも少なくありません」。家を売ったり、退職金まで使い果たした後、ようやくダルクにたどりつく家族もいるといいます。

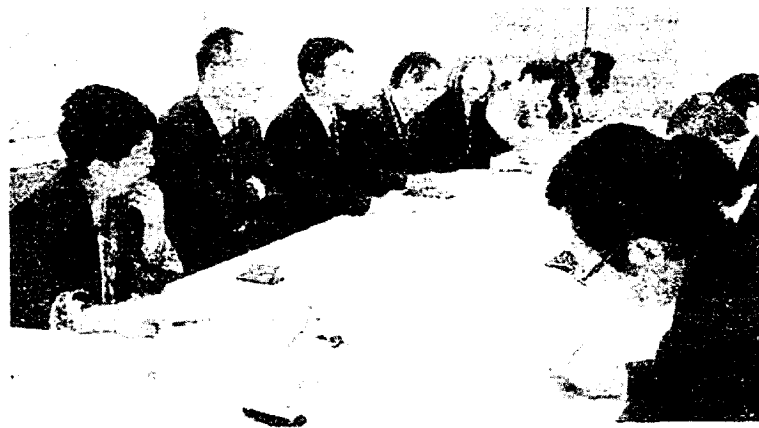
**推計で約10万人**

厚生労働省によると、覚せい剤の使用による精神・行動障害の患者は全国で4000人。ヘロインなど覚せい剤以外の薬物依存の患者は2000人(2001年調査。宮城県の一

## ストップ 生活保護改悪

薬物依存とは、薬物乱用の繰り返しの結果、脳神経の異常が引き起こされ、薬物を使いたいという渴望に對する自己コントロールを失った状態。半永久的に持続するとも言われ、一人での回復は難しい。覚せい剤などの違法薬物や、取り締まり対象になっていない「脱法ドラッグ」に加え、医療機関の処方薬による依存症も急増。

# 患者受け入れ、ダルクが頼み



生活保護基準引き下げについて厚生労働省の担当者の説明を聞く薬家連の人たち。左から2人目は茨城ダルク代表の岩井さん、その右は立ち会った日本共産党の塩川鉄也衆院議員、その右は薬家連理事長の林さん

部と福島県を除く)。「薬物依存症は病気である」という社会の認識が薄いため、患者の家族が孤立せざるを得ない問題を指摘します。「薬物依存は患者本人の心身を傷つけるだけでなく、家族も巻き込む病気です。暴力や借金など全ての問題を家族だけで抱え込み、「家庭崩壊」に追い込まれることも少なくありません」。家を売ったり、退職金まで使い果たした後、ようやくダルクにたどりつく家族もいるといいます。

部と福島県を除く)。「薬物依存症は病気である」という社会の認識が薄いため、患者の家族が孤立せざるを得ない問題を指摘します。「薬物依存は患者本人の心身を傷つけるだけでなく、家族も巻き込む病気です。暴力や借金など全ての問題を家族だけで抱え込み、「家庭崩壊」に追い込まれることも少なくありません」。家を売ったり、退職金まで使い果たした後、ようやくダルクにたどりつく家族もいるといいます。

部と福島県を除く)。「薬物依存症は病気である」という社会の認識が薄いため、患者の家族が孤立せざるを得ない問題を指摘します。「薬物依存は患者本人の心身を傷つけるだけでなく、家族も巻き込む病気です。暴力や借金など全ての問題を家族だけで抱え込み、「家庭崩壊」に追い込まれることも少なくありません」。家を売ったり、退職金まで使い果たした後、ようやくダルクにたどりつく家族もいるといいます。

担当者の説明を聞く薬家連の人たち。左から2人目は茨城ダルク代表の岩井さん、その右は立ち会った日本共産党の塩川鉄也衆院議員、その右は薬家連理事長の林さん

部と福島県を除く)。「薬物依存症は病気である」という社会の認識が薄いため、患者の家族が孤立せざるを得ない問題を指摘します。「薬物依存は患者本人の心身を傷つけるだけでなく、家族も巻き込む病気です。暴力や借金など全ての問題を家族だけで抱え込み、「家庭崩壊」に追い込まれることも少なくありません」。家を売ったり、退職金まで使い果たした後、ようやくダルクにたどりつく家族もいるといいます。

# 薬物依存症 回復への道

国による生活保護の改悪が進められるなか、自治体でも薬物依存症者をめぐる見逃せない動きがあります。大阪市は昨年7月、

根本的理解ない

その中身は、薬物依存症者に生活保護を適用することは、市民の納得を得られない。

同市の担当者は「現状の生活保護制度から薬物依存症者を排除することではない。生活保護制度とは別の薬物依存症専門の施策で対応すべき」という意味だ」と説明します。

一方で「提案」は、生活保護費で薬物を購入している薬物依存症者がいることを挙げ、「生活保護制度の信頼を揺るがす」と述べています。

これに対し、大阪ダルクの倉田めば代表は「薬物依存症が病気で」という根本的な理解が見られない」と指

## ストップ 生活保護改悪



# 欠かせない 経済的安定

摘します。「なぜ薬物依存症者が生活保護費を薬物に使ってしまうのか、市は分かっているのです。薬物使用を繰り返すのは『症状の再発』だということ

現場への応援を

「提案」は、薬物依存症者に対する社会的な見方を助長し、薬物依存症者への認識をさらに悪いものにしかねないと、倉田さんは言います。「これから回復して薬物を使わない新しい生き方を

を目指す人たちをも傷つけかねません。生活保護の現場では、ケー

スワーカーたちが数少ない医療機関やダルクなどと連携して対応を続けています。市は現場の努力を応援し、国に対し具体的に薬物依存症者の治療・リハビリ施設の拡充を強く求め、自らも率先して努力してほしい」

## 締め出しは憲法違反



締め出せば憲法違反になります。

2009年調査の時点で、全国のダルク利用者のうち生活保護を受給している人は6割以上います。現在もずっと多いでしょう。薬物依存症からの回復には患者の経済的安定がかかせません。

宮水耕・東海大学社会福祉学科准教授の話  
そもそも生活保護法第2条は無差別平等を明記しており、原因を問わずに生活困難の状態を根拠に保護を行う制度です。薬物依存症者を生活保護制度から

って薬物依存症者の社会復帰への支援が具体的にいったいどうなっているのでしょうか。

刑務所に入り、薬をやめられずに生きてきた人にも、薬を使わずに地域社会で生きていくという希望をダルクが示してきました。

ここにダルクにしかできない最大の役割があります。ダルク本来の役割を十分に発揮できるように、さまざまな機関が協力してサポートしていくことが、いま求められています。

(おわり)